



東京外語大
山岳会

湖

葉の落ちた木立ちのむこうに
その湖はあった

全部が見渡せるほどのちいさな湖だった
行く道の林の中では初めての鳥に出合った

北の国のはずれの山の空気は動かなかったが
それだけに凍えそうな冷たさが重く沈んでいた
秋は一気に燃えて通り過ぎると

そのひとは言っていたが——
赤いなかまどの実がひっそりと宙に浮いていた

水は澄み切っていて水底が見える
水の中に動くものはなにもいない
風も通らず鳥の声も聞こえない
静寂の中に山の気が満ちている
ひとを拒む気配がある

山がひとを拒むならば ひととはなぜここに道をつけたのだろう
道はけものたちの通り道だったのだろうか
けものたちはこの水を飲みにくる——
しじまがいつそう深くなって山から霧がおりてきた
——むこうの林の中から見つめているものがある

少し隔たった地点から見てみると、一所懸命に登っていたとき近くでは発見できなかった山容に気づいて、改めて魅せられる、ということがよくある。茂野さんは、私にとって、そのような存在であったような気がする。だから、茂野さんを知り尽くしているわけでもなく、いつも近くにいたわけでもないのに、茂野さんと私はどこかで結ばれていて、亡くなる直前にお会いした外語山岳会のメンバーに私になってしまったのも、その故なのかもしれない。つい数日前も、私が滞在していたサンディエゴへこの夏いただいた、学会（日本国際政治学会とアジア政経学会）への入会手続きを終えたとお手紙や、三年ほど前、「THIS IS 読売」の編集部におられた頃の茂野さんの名前がある紙袋が出てきたりして、いまにも茂野さんから電話がかかってきそうな気がする。

私が不熱心な山岳部員であったこともあって、学年で二年先輩の茂野さんとの山での思い出は、さほど多くはない。入部早々の三ッ峠合宿や夏の北アルプス奥又白から北尾根縦走のときのことなどが断片的によみがえるだけである。むしろ健ちゃん食堂の近くにあった掘立小屋のような単独の部室へ昼休みなどに部員が集まっているとき、少し離れたところからいつもニコニコして冗談をいう茂野さんの大きな図体の方が、心に焼きついている。

茂野さんとの交友のなかで、忘れ難い思い出は、たしか一九七〇年五月のことだったと思うが、毛沢東中国を論じたジャカルタでの一夜のことである。当時はまだ文化大革命の熱狂が中国大陸を覆い、アジア各地にもさまざまな影響を与えていたけれど、「東南アジアにおける中国の影」に関する私のインドネシア調査旅行の折に、ジャカルタ駐在の特派員諸氏が共同通信のI氏宅に集まって下さったことがあった。そこには外語OBで中国専門の朝日新聞のY氏もおられ、彼は毛沢東や文化大革命の偉大さを、諄々と説いてやまなかった。つい私との論争になったのだが、彼は私の先輩でもあるので、遠慮がちに私が反論していると、茂野さんはかなりはっきりとした口調で文革批判を展開し、私も教えられたほどであった。ここにも示される茂野さんのジャーナリストとしての現実主義的感覚は、その後のベトナム報道や東欧、モスクワからの報道にも貫かれていたように思う。

そんな茂野さんとは、さまざまところで接点があったのだが、去る九月十日のニューヨークでの再会が最後になろうとは、茂野さんがその夜とても元気で楽しそうにしておられただけに、思いもよらなかった。その日、私はニューヨークの時事トップ・セミナーで講演したのだが、その機会に日経ニューヨーク顧問のO氏らや私のゼミの卒業生ら外大関係者がレキシントン・ホテルの中華レストランで会することになっていた。茂野さんがニューヨークに来ておられることを知ったので、お誘いしたところ、快く参加してくださったのである。茂野さんは、その夜、糖尿病の気配があるので酒は慎んでいるといわれては

いたものの、紹興酒の心地好さもあってか、大層ご機嫌よく弁ぜられた。自分が早稲田、京大と大学を渡り歩いて念願の外語ロシア科に入ったこと、マルクス・ボーイであった学生時代のこと、ベトナム報道を通じたジャーナリズムの在り方への批判と反省などを語られ、そして外大改革への貴重なご意見や私への激励などを頂戴したのである。

こうして楽しい一夜を茂野さんを加えて過ごし、明日はロンドンへ向かうとのことだったので、外語時代に学友会活動で一緒だった読売ヨーロッパ社長の谷口氏に呉々もよろしくといって私は茂野さんと別れた。別れ際に、茂野さんが二年程前、外語山岳会の在り方をめっぐって議論があったとき、そんな面倒くさいことをいうなら自分は退会するといってバンコクから退会届けを送ってこられたことがふと私の脳裏をよぎったので、「茂野さん、山岳会のことは元のままでいいですね」といいかけたのだが、こんなに楽しくしておられるのにと、つい口に出しそびれてしまった。

その私が一年に近いアメリカ生活を終えて帰国すると、ニューヨークでの茂野さんとのスナップ写真が、会合をアレンジして下さった外語中国科先輩のK氏から送られてきた。その直後に茂野さんのブリュッセルでの客死という訃報に接したのである。驚きと痛恨の気持ちをあらわすすべもなかった。せめて私にいまできることはないものかと思いがぐねていたところ、これも茂野さんとの絆のなせる故なのだろうか、その夜偶然にも、ベルギー駐箚の加藤淳平大使から別件で拙宅にお電話をいただいた。大使も茂野さんの客死を知っておられたので、私の身代わりとしては失礼だが、外語山岳会にも代わって、読売新聞アジア総局長もつとめた一人の優れたジャーナリストの死をお悔みしていただけないものかとお願ひしたところ、大使はご多忙中にもかかわらず快く引き受けて下され、茂野さんの遺体が茶屋に附されるところをご夫妻で立ち会って下さった。

チャペルのようなところから音楽が流れるなかを少人数の葬列が進む雰囲気のととてもよかったこと、洋子夫人やご長男の浩樹さんらご遺族が大層立派な方々であることに強く感銘したことなど、加藤大使はその日の模様を再度電話で私に伝えてきて下さった。

茂野さん、どうか安心してお眠り下さい。 (東京外語大教授・同大学山岳部長)